

## 幼い娘のおむつに遺書——覚悟を貫いて『つなぐ』実践倫理

「12人の挑戦者から学んだこと」をテーマに、実践に根ざした示唆に富むご講義を賜り、誠にありがとうございました。医療・福祉・現場・政策をつなぐ先生の歩みと語りは、単なる知識の共有にとどまらず、私たち一人ひとりの想像力と行動を強く揺さぶるものでした。

本講義を通じて最も印象に残ったのは、先生が一貫してつなぐことを大切にされてきた姿勢です。人と人、現場と制度、当事者と社会を結ぶえにしを丁寧に編み続け、その輪を広げることで、社会そのものを動かしてきた実践は、医療福祉に携わる者にとって大きな指針となるものでした。席を籤引きにする、肩書きを外す、講演料を取らないといった8つのシキタリも、すべてが水平な関係性をつくり、想像力を広げるための具体的な工夫であり、前例を超える姿勢そのものだと感じました。

表現の力にも強い衝撃を受けました。重く、暗くなりがちなテーマに対して、アップテンポなリズムやユーモア、笑いやおかしさを交えながら社会に訴えかける姿は、伝え方そのものが倫理実践であることを示していました。言葉をつくり、言葉を退治するという試みを通して、寝たきり老人という言葉が社会の見方を固定化してきた事実や、抑制を縛ると言い換えることで現実が可視化される過程は、言葉が人の尊厳を守ること、奪うこともあるという厳然たる事実を突きつけるものでした。

身体拘束の体験実践の紹介も、深く心に残っています。必要であれば仕方がない、安全のためという言葉が、わずか15分の拘束体験によって、怖い、長い、悲しいという実感へと反転する、その変化は、当事者の苦しみ、想像ではなく自分事として立ち現れる瞬間でした。倫理とは理念や規範ではなく、体験を通して初めて理解されるものなのだと、あらためて考えさせられました。

さらに、視覚障害や高齢、精神障害のある方々をめぐる行き違いを、性格や個人の問題ではなく、情報の非対称性、予測不能性への恐怖、認知的枠組みの違い、失われたものの大きさ、という構造として捉える視点は、現場で起こる怒りや混乱を読み解く重要な鍵を与えてくれました。

怒りの背後にあるのは攻撃性ではなく、不安や恐怖であり、守ろうとする必死さであるという指摘は、支援者としての関わり方を根本から問い直すものでした。

家族との関係についても、家族が抱える物語や孤独、罪責感に目を向ける必要性が語られ、支援者側の疲弊も含めて、相互理解のための想像力が求められていることが強調されていました。支援は一方通行ではなく、お互い様、共同作業であるというメッセージは、医療福祉倫理の根幹をなすものだと感じます。

講義全体を通して、先生が示された想像力と度胸は、社会を変えるための実践的な倫理そのものでした。データを用いて現実を示し、前例を疑い、メディアや行政、当事者を巻き込みながら、ユーモアを忘れずに伝え続ける姿は、私自身の研究や実践の在り方を深く省みる契機となりました。

最後になりますが、私自身、今年1年を振り返り、修士論文の作成、仕事、授業の両立という慌ただしい日々の中で、このような講義に出会えたことを心より感謝しております。学ぶことの喜びと、挑戦し続けることの意味を、改めて実感する一年でした。来年もまた、学ぶことに感謝しながら、自らの現場で想像力と度胸をもって向き合っていきたいと思います。

このたびは、誠にありがとうございました。